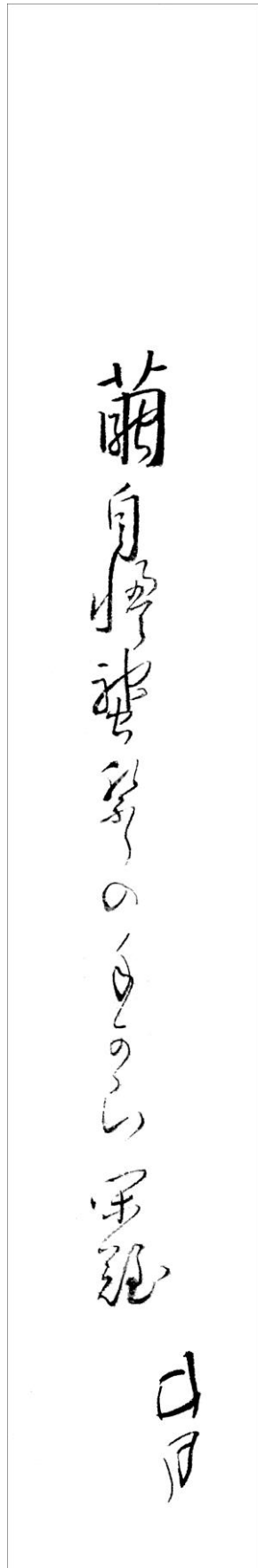
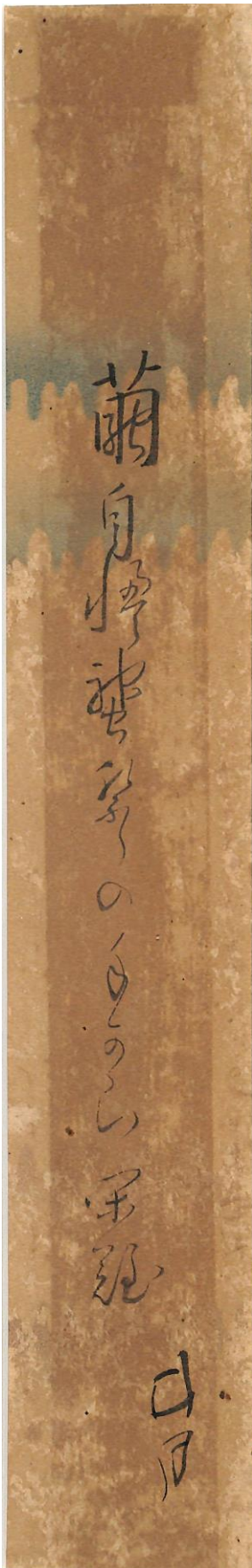


井月作品「繭自慢」の句について

令和2年 一ノ瀬武志



私の手元にある、井月真筆の短冊です。だいぶすすけていますが、井月らしい流麗な文字が書かれています。右側は、グラフィック処理で文字だけ抽出したものです。

繭自慢蚕祭りの手がらかな 井月
(まゆじまん かいこまつりの てがらかな)

井月全集には「蚕玉祭の」と出ており、「蚕祭りの」とは出ていませんので、新発見と思われます。

「神虫」と書いて蚕と読ませるくらい、かつての農家にとって蚕は大事であり、貴重な現金収入源でした。蚕が生活の中心だったと言ってもよいでしょう。井月は、蚕を詠んだ句をいくつも作っていますが、きっと泊めてもらった家で蚕の俳句を書くと、家人に喜ばれたのだと思われる。

蚕祭をいつ行うか、地域によってさまざまだと思いますが、初午（2月最初の午の日。旧暦だと3月上旬ごろ）に行うところが多いのではないのでしょうか。

「今年の繭は自慢できる出来ですね。蚕祭をしっかりとったおかげでしょう」といった意味の句と思われます。